

「執行人」

〇七〇一一一八
人間学部人間科学科三年
興津 茉由

その場所を歩くと、足音が遠慮がちに響いた。存在を消すつもりもなく、しかし堂々と主張するでもない。

歩きながら一つ一つの独居房を覗く。皆、頭を廊下側に向けて寝るよという、不可解な規則を守って眠っている。眠っている、というのには語弊がある。煌々とした照明の下、響く足音をすぐ傍で眠るという行為は、眉間に皺を寄せ、何度も寝返りを打つ事を伴うこととなり、それは最早私達が一般的に用いる「眠る」からは遠いものとなっていた。

「看守さん」

つい先日、新たな住人が入ったばかりの独房の前で、足音は止まった。

「今はもう消灯している。発言は控えろ」

相手にだけ聞こえるような声で突き放す。

「じゃあ寝言ってことにしておいてくれ」

独房の中を覗くと、声の主が規則通りの体制で、しっかりと目を瞑っているのが見える。寝言の中に問題発言がないか確認するという名目ならば誰も不快にはならないだろう。私は彼——呼称番号八二〇六番——の戯言に耳を傾けることにした。

「看守でも色んな人間がいるもんだな」

それは深く同感する、という言葉に胸に押し込んだ。このメディアに殆ど切り離された世界では、同じマニュアルを使いながらもその意味を自分勝手に解釈して、時には自身の正義のために平気でそれを破る人が大勢いる。

「他の看守と比べると、お前は白黒つけるのが苦手と見える」

出会って数秒と経っていないのに、私の人となりを見抜き、わざわざ指摘する様が、まだ人間らしさを残しているように感じられ、そこに恐怖を覚えた。この恐怖という感情を他の人間に伝えた事はない。人によっては相手に失礼だと叱咤され、また他の人にはそんなくだらない感情を持つなんてと嘲笑されるのが目に見えているからだ。

「で、何が言いたい」

それは目の前の男にも同様なことで、私は焦燥を殺したつもりであったが、思わず語尾を強調してしまった。慌てて辺りを見渡したが、誰も反応する者はいなかった。ふと、中から笑い声が聞こえた。

「ただ、俺達にとって都合のいい方向に転がってくれば嬉しいなって、それだけよ」

もう、やめよう。そう自分に言い聞かせ、また先ほどと同じように足音を響かせた。あの話を深く掘り下げてはいけない。彼に、否、彼らにとって、どのように都合がいい展開が待つて

いようと、行き着く先はただ一つなのだから。余計な情報を入れると、正義が鈍る。これは、拘置所長である斉藤さんが、私がここに配属された時に最初に教えた言葉だった。下手な同情や深入りをすると、実際自分が彼らを手にかける時に、迷いが生じるという意味だ。死刑囚と生活を共にするようになって七年。未だ「その瞬間、に立ち会った事はない。斉藤さんの言葉が正しいのかどうか、私はまだ確信が持てずにいる。

見回りを終えて監視室へ向かう。監視室と言え、そこは私にとって一種の休憩室のような感覚であった。間接的に監視しているものの、この中では数少ない、囚人と直接かかわらなくて済む仕事であるからだ。

「ああ、大山か」

中に入ると、この時間帯の監視員の一人であり、私と同期の高橋が、私に向かって手を振った。沢山のモニターが並ぶ机の前に用意された椅子に腰かける。

「問題はないか」

私はモニターに軽く目を通しながら聞いた。

「特には。今自殺防止房に入っている人は、独居房でも構わない人ばかりだからな」

自分の発言に、高橋は苦虫を噛み潰したような顔をした。高橋は囚人達の人権を意識し、同情する余りにいつもジレンマを感じている。

裁判員制度が導入されてから十五年。そのせいか、死刑判決がこれまでよりも格段に増えた。それに拘置所が対応しきれず、独居房では収容しきれないくらいの囚人が出てしまい、仕方なく囚人の中で自殺をしてもおかしくはない者を選出し、自殺防止房に入れた。

「本来ならその時まで健やかに生活出来るような人だって、こんな監視カメラ付の場所に閉じ込められるから精神を病むんだ」

高橋は自殺防止房に規定に達しない囚人たちを、そこに収容するのを最後まで反対していた。私も出来るなら高橋に賛同したい。しかし、斉藤さんがした高橋への反論に何も言い返せなかった。

「健やかだろうとなんだろうと最後は死ぬんだから一緒だ、なんてよく言えるもんだ。あの冷血人間が上にいるせいで、こっちは本当にやりにくい」

その一件から、元々折り合いが悪かった斉藤さんと高橋の間には完全な溝が出来た。

「そういえば」

私は強引に話題を変えた。

「最近入った八二〇六番とは会ったか」

言った後で、まずいと思った。高橋は囚人たちを呼称番号で呼ぶ事を嫌がる。

「八二〇六番……柵橋さんのことか」

恐らくどこの拘置所を探しても、必ず名前を聞き出してそれを呼ぶ看守など高橋一人だろう。これはマニュアル違反ではなかっただろうか。ふと記憶上のマニュアルを開いてみたが、やめた。きっと高橋は違反であっても無視したに違いない。

「気さくな人だ。話しかけようとしたら、向こうから話しかけられた」

話しかけられたのは私だけではないらしい。

「気さくというのも、どうかと思うけどな」

「そうなんだ。とくにウチにはアイツがいるからな。自衛のためにも気をつけとけとは伝えておいたけど、心配だ」

囚人を呼称番号で呼ぶのを嫌がる一方、高橋は斉藤さんの名前を呼びたがらない。

「アイツはちょっとした世間話ですら拒否して、すぐ懲罰を与えようとする。柵橋さんは一番

嫌がられる類の人だ」

世間話は遵守事項違反である事を柵に上げて話す高橋に対し、私達の話を知っているものの、参加しようとはしない他の看守に一瞬だけ顔を向けて、お互いに苦笑した。

「.....あ、そろそろまた見回りの時間か」

高橋はモニター上に表示される時計を見て立ち上がった。制服にスニーカーという滑稽な井で立ち、彼が少しでも足音を立てないように歩くために考慮したものだ。私も眠りを妨害しながら歩くのは気が重い、そんな事を気にせず歩くことを、長く主流としてきたこの拘置所では、足音を立てないという行為は、なんとなくいけない気がして、結果的にあのような足音になってしまう。きっと八〇二六番は、そんな私の足音から人となりを見判断したのだろう。

人が減った監視室でモニターを見つめ続ける。自殺防止房に入れられた人々は、静かに眠る事を追い求めている人もいれば、執拗に頭を掻き毟っている人も、どうやら奇声を上げているらしい人もいる。

本当の恐怖は、人間らしさを残している囚人ではなく、人間らしさを失った人間の方を、動揺もせず見つめられる自分に向けられるはずだ。そんな事はとうに気づいているのに、私はそこから目を背けている。

夜勤の場合帰宅出来るのは午前九時となる。いわゆる昼夜逆転というものだが、今の私には自分の疲れよりも気にしなければならない事があった。疲れた体を執拗に照らしつける朝日を背に、私は自宅のドアを開ける。

「ただいま」

声は家の静けさを余計に強調したようだ。昨日私が家を出た時とまったく変わっていない靴の位置を尻目に、奥の部屋へ進む。部屋へ近づくとつれ、静けさは薄れ、代わりに吐息が漏れる音が頻繁に耳に入るようになった。

「.....百合香」

ベッドの中で苦しそうに喘ぐ妻の名を呼ぶと、彼女は視線だけこちらに向けた。

「まだ、よくなるのか」

手のひらで頬を触ると、じつりと汗をかいたそこは熱かった。この一週間、ずっと高熱を出したまま下がる事がない。出来る事なら仕事など休んで彼女についていたいが、先の事を考えるとそれも出来ない。

「流石にここまで続くと心配だ」

頬から手を離し、今度は少し膨らんだお腹に手をあてる。これが、今仕事を休めない理由だ。生まれてから暫くは子供が起きている時間に家にいたい。何かあればすぐに帰れるようにしたい。この希望を叶えるには、今仕事を休むわけにはいかなかった。

大学時代からの付き合いで、その当時法学部に在籍していた百合香は、とくに育児に関する法について熱心に勉強していた。生まれたら二人で育児がしたいというのは、私以上に、百合香が十年前から望んでいたことだ。

「ごめんね、疲れてるのに心配させて.....」

百合香がか細い声を出す。それが健気に感じられて、お腹に置いた手をそのままに、もう片方の手で百合香の手を握りながら、私もベッドに横になる。

「少し眠ったら、また病院に行こう。今度は車でもう少し大きい病院まで連れて行くよ」

言い終わるかどうかで、私は眠っていた。

いつのまにか夢を見ていた。遮るものなど何もない草原。それも、石ころひとつ落ちていない場所だ。そこで少女が駆け回っている。その夢の中では、少女は私の娘だという前提があっ

た。無垢な笑顔が向ける先には、私と、熱などとうに下がった百合香が立っている。

家の中では、確かな命をはっきりと実感出来る。生を待っているという、死刑囚とは逆の位置にいる存在が、私にとっての癒しだ。これからも、この先も。

病院へ行った結果は、検査してみてもまた後日ということであった。検査費用の大きさが更なる不安を煽ったが、今はこれが無駄な出費であったということを祈るしかない。

拘置所は何も変わらない。そんな日々の繰り返しは、退屈などを遥かに凌駕する安堵がある。とどのつまり、私は“その瞬間、がくる事を恐れているのだ。自分が看守から、“執行人、となる瞬間を。この仕事に就いた時から覚悟はしている。それでも、法務大臣に判子を押すのを少しでも躊躇って頂きたいという気持ちが湧き出てしまうことは人間として当然の感情だと信じている。例えそれが仕事として不適切であり、また、何より意味のない感情だとしても。

「願い事は、あるか」

「手紙が書き終わったんだ」

八二〇六番は立ち上がって、いそいそと机の上に置いてあった封筒を手に取り、私へ手渡す。思いのほか達筆な字で宛名が書かれていた。苗字が棚橋で始まる女性名である。

「娘だ」

娘といわれ、夢に現れた少女を思い出す。

「妻はもう俺を愛してはいない。離婚よりも寡婦になった方が都合がいいらしいから、戸籍はそのままだがな。娘とは奴が面会を許さなくて、逮捕以来もう十年会ってないが、再来週二十歳の誕生日なんだ」

つまり、逮捕されて十年後に、確定死刑囚となったことにもなる。だから男は死刑執行が可能なこの拘置所へ移った。この十年は、今までの事例からしても短い方だ。たった十年で自分が生きるべきか死ぬべきなのかを診断されたことになる。それでも、残された娘は、被害者側にとっては、この十年という期間はあまりにも長かったはずだ。

二十歳になる娘は、死を待つだけの存在である父親をどう思っているのだろうか。その想いに、父親はどう応えるつもりなのだろうか。封筒が、重みを増した気がした。

「検閲をしてからの送信だ。了承してくれ」

私は独居房を後にし、そのまま検閲所へと向かった。この手紙を検閲するだけではない。恐らく、まだ検閲の終了していない手紙や書物が溜まっているだろうと予測したのだ。

重い鉄扉の先にあるその場所は、囚人と直接関わらない、もう一つの仕事場だ。重い扉を開けると、拘置所で一番日当たりのいい部屋に、たくさんの紙の束があった。

「お疲れ様です、検閲に来ました」

声が奥の壁に跳ね返るように挨拶すると、紙束の奥で白髪交じりの黒髪が揺れた。

「ああ、君か」

老眼鏡をかけ、左手には本を、右手には黒いマジックを手にした斉藤さんは私を一瞥した後、また本を検閲する作業に移った。私も隣で同じ姿勢をとる。

心情の安定のために、死刑に関するもの、許可された人間以外との接触を図るもの等が消される。心情の安定のためという大義名分がその言葉通りに使われていないというのが、高橋の口癖だ。役人は皆、自分に都合の悪い事をこの言葉でごまかすのだとも続ける。だから高橋は検閲をやりたがらない。

ここでも、私は性格が出てしまい、何度もマジックを止めてしまう。その時はいつも、横で斉藤さんのマジックがいつそう大きくなるような気がする。チラリと横目でその本を見ると、

最早内容がわからないのではないかと危惧するくらいに黒い線がたくさん引かれ、迷いの無い線はこの間も増え続けている。

「今日のニュースは見たか」

珍しく、斉藤さんが私に話しかけてきた。今日のニュースで、わざわざ斉藤さんが話しかけてくるようなものなど、一つしかない。

「無所属の法務大臣が就任されましたね」

日本という国が出来て二千と三十年ほど経つというのに、私たちは未だに国の代表者を間違える。先日秘書を通じて献金を行い、これまでの法務大臣は辞任、新たな大臣が選考されていた。

厳密に言えば私たちの一番上に立つのは、この法務大臣であり、私達の業務方針も全て大臣の意向によって決められる。しかし実際に関わる機会がないため、こういう機会がなければ気にも留めないのも事実だ。

一瞬、マジックの音が止んだ。

「彼は、元々死刑確定から執行までの間にかかる経費削減を主張していた人だ」

そこでの経費とは、それまでの囚人の食事、施設の維持費、私たち看守の人件費等が上げられる。これを削減させる、一番手っ取り早く確実な方法が脳裏を過ぎった。

「きっと、増えるぞ」

何が、とは言わないし、聞かない。お互い描いているのは同じものに違いないからだ。

暫くすると、マジックの音は再開された。容赦なく消されていく文字が、先ほど一人ひとり見てきた面々と重なって見えた。

『——そもそも、裁判員制度施行と同時に死刑制度廃止をしなかったのがいけないんだ。法について知識のない一般人を巻き込めば、被害者に肩入れしすぎて重い刑罰が不必要なまでに採用されるのはわかりきっていた事じゃないか。十五年間それを見ていて何の見直しもしないなんて、国会は怠惰している。それに加えて今回の人事はばかげている。経済と人の命を天秤にかけて経済を取る奴を法務大臣に任命するなんて、書類の上でしか国民を見ていない証拠だ。しかも、経済を重視するなら一刻も早く死刑制度を廃止する事が重要だと何故気づかないのだろう？ 国連が死刑廃止を推進している現在、海外との関係をよくするためには死刑廃止は必須項目と言えるのに。第一——』

そこまで読んでメールを閉じた。帰宅したらパソコンに届いていた、高橋からのメールだ。高橋は自分の正義が何よりも正しいと信じていて、しばしばこのような類のメールを送りつけることがある。時々その行動を鬱陶しく感じる反面、彼の自信が羨ましくなる。

高橋は出会った頃から死刑は廃止されるべきだと訴えていた。自分は囚人となった人々の人権を守るためにこの仕事に就いたのだとも。その時は素直に人権を尊重する考えを受け入れた。そして、軍隊のようだと揶揄されることもある位に、上下関係が厳しい職種の中で自分の信念を貫こうとする姿勢に、憧れさえ抱いたこともあった。だからなのか、高橋は私に対して、ただの同僚以上に信頼しているようで、度々飲みにも誘われる。お互い酒に強い方ではないが、いかんせん普段が開放的とは言えない空間だ。その時間はストレスを緩和させるには十分な効果を持っている。

『メールだけじゃ言いたいことも言いきれないだろう。今度飲みに行こう』

長文のメールにこれだけでも、高橋なら許してくれるはずだ。未だ検査結果が出ない百合香に不安が残るが、このまま放置しては、独身で一人暮らしの高橋が、行き場を失いかけている自分の信念に押しつぶされるのではないかと心配でもある。

午後七時という時間にもかかわらず眠っている百合香を起こさないように、静かにカップラーメンをすすする。子供が生まれてきたら、こうもいけないだろうなと思うと、これはこれでいい気分がした。

『職員全員に告ぐ。急用のない者は、至急監視室へ集まるように』

検閲中、房内放送が流れた。監視室へというのは、無人に出来ない場所が担当である看守にも告げたいという事であり、つまりは何度も繰り返したくはない話題なのだとわかった。私も急用のない者の一人であるため、急いで向かう。監視室が近づくにつれ、何とも言えない不快感が増していった。

「――これで全員か」

監視室へ行くと、既に何人かが集まっていた。監視担当以外は、皆直立した斉藤さんを見つめている。

「仲原は独立運動場の監視をしています」

奥で誰かが返事をする、斉藤さんは頷き、小さく深呼吸をした。声が、少し低くなる。

「先ほど、法務大臣が死刑執行起案書に捺印したとの連絡が入った」

胸をえぐられた気分がした。監視室にどよめきが走る。

「昨日着任したばかりなのに……」

「上申書も既に作られていたのか？」

思い思いに声をあげるが、この場所では有益な返答が出来る人間などいない。

「大臣が政策を実行した。それだけだ」

この、誰もがわかりきっている事実だけが、私達へ与えられた答えだ。

「誰ですか」

思わず私は聞かずにはいられなかった。誰であろうと、それなりの思い入れはある。

「……それは言えない。皆の対応が、心情の安定を乱す可能性がある。執行日まで、本人が知る可能性をゼロにしておかなければ」

ここでまた、今日は夜勤の高橋の口癖を思い出した。どうやら心情の安定という言葉が都合よく使われてはぐらかされるのは、私達も同様のようだ。

「この仕事をしているならわかっているとは思いますが、捺印を押された五日間以内に我々は死刑を執行しなければならぬ。勿論当日担当だった者には特別手当が入る。各自、手順を今一度把握しておくように。以上」

話は済んだものの、返事は乱れ、足の動きもまばらであった。私はこれ以上その場にいたくなく、誰よりも早く監視室を出た。平常心で囚人の顔を見ることなど出来ないと思い、逃げるように検閲室へと向かった。

妙に日当たりのいい部屋の中で、感情を消すように、本の中の文字を消していく。本が真っ黒になろうとも、私の心は晴れなかった。

電話のコールは十回続いた。それでも他に当てがない。この電話が留守電に切り替わらない限りは切らないつもりだ。

「もしもし？」

高橋は寝起きの声で出た。

「急なんだが、今日勤務を代われないか」

「……どうした」

七年間勤務を誰かに代わってもらおうどころか、遅刻も早退もしたことがなかった私の突然の

申し出に、何かを察したらしい。声はもう、工作中と同じものだった。

「病院から、検査結果を話したいから来てくれと言われた。出来れば二人で来てくれと」

病院で、二人揃ってというキーワードだけで、いい結果ではないなというのはわかりきっている。明日は休みだが、依然体調が芳しくない百合香の様子や、これから仕事で起こるだろうことを考えると、これ以上訳のわからない不安を持ち続けるのは私にとってもよくないと判断した。そして、今日非番で一番頼みやすい人物として、私は高橋を選択した。

「わかった。今日は奥さんの傍にいてやれ」

「悪いな、今度奢るよ」

用件だけ済まして早々に電話を切る。

「百合香、お待たせ」

ソファに腰掛けた百合香が潤んだ目でこちらを見上げた。その目が何を意図しているのかわかっている。私は百合香に近づき、頭を撫で、耳元でささやく。

「まだ何も言われてないんだから。不安になるより、もうすぐよくなるんだと考えよう」

不安なのは私も同様だった。それでも、実際にお腹の中で赤ちゃんと共に存在している彼女のそれに比べたらちっぽけなものであることには違いない。私に出来るのは、安全運転を徹底して、病院までの快適な道中を演出することだけだった。

診察室へ入ると、お腹のレントゲンと思われる写真が数枚並べられていた。その中には小さな子供のような物体も見え、それだけで思わず感慨深くなる。ただ、お腹の大きさにしては子供が小さいという点を除けば。

「ここを見てください」

医師は棒で子供のお尻と思われる部分の上にある、不自然に白くなった箇所を指した。

「胎児に、大きな腫瘍が出来ています……大山さん、落ち着いて聞いてくださいね」

医師はそう前置きをし、百合香の目をしっかりと見据えた。

「このまま放っておけば、胎児どころか母体までもが危険な状況になります。今回は、諦めた方がいいかと」

瞬間、百合香の目にずっと溜まっていた涙が堰を切ったように溢れ出した。慌てて彼女の肩を抱くが、もし彼女が隣にいなければ、ここまで冷静にはなれなかっただろう。

「どちらも助かる方法はないんですか？」

自分でも、まるで安いドラマのような台詞だと感じた。

「……ない。と言い切ることも出来ませんが。これは母体ではない、胎児の手術となってしまいます。膨大な費用をかけて成功率が十割あるかないかです。二人ともまだ若い。次回に確実に子供を作る方が得策だと思います」

ドラマとの違いはここにあった。きっとドラマの世界では、即答でその十割にかけただろう。現実では資金を用意する策がなく、何よりそこまでして子供と妻の両方を失う事を恐れている冴えない主人公がいる。

「二人で、考えてみます」

百合香の肩を抱く手に力が入った。とにかくあまりにも急すぎる。一度落ち着きたかった。家路に着く道中、車を運転しながら頭の中を反芻しているのは、百合香の涙でも、医師の諦めろという言葉でもない。

「当日担当だった者には特別手当が入る」

斉藤さんから聞かされた、この言葉だった。

帰宅した後も会話はなかった。お互いがお互いに、そしてもう一人に、何を声かけていいのかわからなかった。もう、気休めは言えない。後は選択するだけだ。手元には、今まで様子見

をするだけで処方されてこなかった解熱剤の処方箋がある。

「.....お腹、すいたね」

沈黙を破って、百合香が私に声をかけた。本当はそんな事微塵にも思っていないはずだ。

「そうだね」

私も、思ってもいない返事を返す。

「久しぶりにご飯つくるよ。何がいい？」

昨日までの私なら、無理しないで寝ている。と言っただろう。ただ、それを今やる事は百合香を裏切るような気がした。

「肉じゃがとか？」

あまりにも定番すぎるメニューに、思わず笑いがこみ上げた。百合香も笑顔を作る。

「わかった。じゃあ買い物行かないとね」

財布の中に押し込まれた領収書と処方箋なんてなかったかのように、たった数十分前の出来事を忘れてしまったかのように振る舞う。今はそれでいいんだと信じたい。休みの日くらいは、誰かの命が他の何かのために落とされる事なんて考えたくなかった。

一日休んだくらいで、拘置所の風景にこれといった変化はない。だからこそ、微妙な変化に妙に気がつく場所でもある。朝の巡視中、一人ひとりの部屋を回り呼称番号を言わせている中、一つだけ違う箇所を見つけた。

独居房にいたはずの七三二四番がいない。

昨日、ついに、“その瞬間、”が訪れた。

その事実を飲み込んだ瞬間、私の中で様々な思いが同時に駆け巡った。

七三二四番はどのような人物であったか。考えてみても何も浮かばない。私は彼と必要以上のやりとりなど何もしなかった。

執行が決定した次の日に執り行われるなんて早すぎやしないか。きっと、それだけ上部の人間は、死刑囚を減らすことを本格的に取り組んでいるのだろう。

そして、それを実際に支給された、否、執行したのは、誰だ？ 何人かの顔を思い浮かべた後に、昨日、本来は出勤の予定ではなかった人物——即ち、私の代わりに出勤となった高橋を思い出した。

全員が執行に直接関わるわけではない。それでも、選ばれば拒否をすることは難しいはずだ。死刑執行を誰よりも忌み嫌う彼は、どういった気持ちで執行を目の当たりに、もしくは自らが“執行人、”となったのだろうか。

巡視も適当に、私は廊下を走った。確認せずにはいられなかったのだ。昨日、どのようにして一人の命が合法的に奪われたのか。確実に死刑執行に立ち会った人物を探し、私は誰よりも足音を立てて走った。

「どうした、走るなんて、君らしくないな」

事務室へ向かう途中に、目的の人物に出会うことが出来た。懲罰房に収容されていた衆人の一人を保護房に移している途中だったらしい。革手錠で拘束されている女が泣き叫んでいるにも関わらず、斉藤さんは顔色一つ変えることはなかった。

保護房の中で、わずかに許された体の自由の限り暴れまわる女に目もくれず、斉藤さんは重い鉄の扉を閉めた。叫び声は扉の奥に吸い込まれるように途絶える。

「.....昨日、執行されたのですか」

突如訪れた静寂を、私は壊した。

「ああ」

なんだ、そんなことか。とでも言いたいような気のない返事だった。あまりにもあつけない肯定が、私の心をざわつかせる。

「実際に執り行った職員は、誰ですか」

「あれは確か……仲原、佐々木、堀口、浅野、高橋の五人だったかな」

最後の名前は、私を絶望に落とした。もし私が昨日病院に行っていなければ、高橋は人を殺さずにすんだ。そして、私を何よりも絶望させたのは、心のどこかで自分が逃れられたことに安心しているという点だった。

「執行は、問題なく終了したよ」

「結局、高橋は執行を受け入れたのですね」

老眼鏡の奥の瞳が、こちらを凝視するのがわかった。何を当たり前なことを。そう、目で訴えかけられる。

「まさか君も反抗する気か」

肯定するつもりはないものの、真っ当に否定をする事も出来ず、一瞬口をつぐんだ瞬間、斉藤さんは鉄の扉を蹴り上げた。

「確定死刑囚に情けをかけるな。それが出来ないのなら奴らは人でないと思え」

人ではないと思え、という言葉が、余計な情報を入れるな、という言葉と同意だと気づくのに、そう時間はかからなかった。死刑執行をためらうのは、この国の正義を鈍らせる事になる。

「でも、彼らは、生きている人間です」

私の問いかけに、斉藤さんは深くため息をついた。そして、聞き分けの悪い子供を諭すような口調で言う。

「大山くん、それは、誤認識だ」

やさしい口調であるものの、表情には笑顔ひとつない。

「日本国憲法では、基本的人権は侵すことの出来ない永久の権利とされている。基本的人権のひとつの生命権が公的に剥奪された時点で、人間としては認められない」

あまりにも流暢な説明に、それが理にかなっていると感じてしまいそうになる。

少し、彼が職員に話す時には感情的になった気がした。

「それに、死刑が確定しているくせに何十年もぬくぬくと生きていては、被害者が報われな
い。……私のように」

これは、彼の言うところの余計な情報にあたるだろうか。私は深入りするのを躊躇った。どちらに転ぶにせよ、私情を挟む事で仕事に差し支えが生じるのは怖い。それでも——仕事など全て投げ出せば、続きを知りたい自分がいることを否定できない。

「あなたの話を聞くことは、正義が鈍ることにはなりませんか」

だからまず、質問をした。

「わからない。それは君が決めることだ。自分にとって不都合が生じると感じたら、ここから立ち去りなさい」

私が動くそぶりを見せないことを確認した後、斉藤さんは再び口を開いた。

「三十年は前になる。妹が殺されたのは」

初めて聞くことだった。驚嘆の声を、ごくりと生唾を飲み込むことで押し込んだ。

「顔も知らない男による、狂った性欲を満たすためだけに行われた犯罪だ。欲望のままに動いた行為は穴だらけで、犯人はすぐに捕まった。そして今は、奴はそんな事件などなかったかのように、妹がたどり着けなかった現代で暮らしている」

面識がない、性欲を満たした、殺人。この三つだけで、この職に就いている人間なら死刑の可能性も十分にある判例だとわかるだろう。斉藤さんは老眼鏡を外し、暗い廊下をじっと見つめた。

「無期懲役の判決が下った時には、愕然とした。事件と裁判に関わる全てを憎んだ。確かに奴が死んだところで、妹は生き返らない。悲しみが癒える事もない」

斉藤さんの声が震えている事に気づいた。足元には、小さな水滴が零れて滲んでいる。

「ただ、妹を奪われた怒りに加え、妹の人生を奪っておきながら、犯人は堂々と生きているという怒りを抱えて、私はこれからも生きていかねばならない。刑期をまっとうして釈放された今、この怒りを、どこにもぶつけてはいけないなんて、あまりにもやるせないじゃないか！」

狭い廊下は声を何重にも反射して響いた。

「申し訳ない。今、一瞬だけ拘置所長という立場から離れてしまった」

斉藤さんは胸ポケットからハンカチを取り出し、目もとを拭った。

「正直、拘置所長に任命されて安心したよ。これが刑務所だったら、私は仕事が出来なかっただろう」

「正義が、鈍るからですね」

小さくうなずく顔は、もう湿ってはいない。

「この幸運は必ず仕事で返してみせるさ。法務大臣が捺印した起案書は一枚だけではない。大山君も、覚悟しておきなさい」

斉藤さんは廊下を歩き出した。自分の存在を囚人たちに知らせるかのような、けたたましい足音は、高橋のそれとは真逆である。

最後まで聞いた話で、私の正義は鈍らなかった。そもそも、私には斉藤さんや高橋のような、はっきりとした正義がなかったのだ。人間とは認められないはずの、私達となんら変わらない外見を持つ彼らの命の重さが量れない私には、誰の気持ちを汲めばいいのかがわからなかった。

職務を終えて帰宅すると、最近では珍しくテレビの音が聞こえてきた。リビングの扉を開けると、ソファに腰掛けた百合香がテレビを着けっ放しにして寝息を立てている。テレビの画面を見ると、日本で六例目の子供の臓器移植が成功したという報道が流れている。

その報道に、そういえば裁判員制度が始まった年は、臓器移植法が改正された年でもある事を思い出した。『脳死は人の死である』という言葉は何度も聞いた。確か、私はこのこれで多くの子供が助かるんだと思った。この時に必ずと言っていいほどに脳死したまま数年間眠っている子供とその親の映像が合わせて報道されていたが、どちらも死を待つならば、一人は生き延びた方がいいと、何の疑問もなく考えた。

もし、これが私の正義だとするならば、確実に守れる命があるならば、一つを切り捨てる——つまり、今日の前にいる一人の命を諦めて、もう一人を守る事が、私の正義となる。

起きたら、私から話を持ちかけるべきか。テレビと百合香を交互に見ていると、次第に百合香が瞬きを始めた。

「あ、おかえり」

今日はまだ体調が良さそうだ。

「ただいま」

今度は、ちゃんと届かせるために言った。ニュースは既に臓器移植についてから、地方の小さな動物園で、二足歩行をするウサギが大人気というものに切り替わっていた。

「可愛い」

百合香が目を細めて言う。

「そうか？」

試しに画面を見たら、言葉に詰まった。百合香が見ていたのは、後ろ足だけで歩くウサギと、それをしゃがんで見ている小さな子供の映像であった。先ほどの言葉は、どちらに対して発せられた声なのか。私には聞くことが出来ない。

「ねえ、慧ちゃん」

百合香が私の名を呼んだ。数日前までは、こうして名前で呼び合うのも後少しだね、と話していたのに、それ以外の呼び方をされる自分は遠い場所にいるような気がする。

「死刑になっちゃった人たちの臓器って、移植出来ないのかな」

その二文字に、心臓が跳ね上がった。家でその言葉を口にしたこともないし、聞いたこともない。職業に後ろめたさがある訳では決してないが、なんとなく家庭内に持ち込む話ではないような気がしていたのだ。

「少なくともうちの拘置所は絞首刑だからな。脳死状態にするのは無理だ」

「今の医学でそれくらい出来そうなのね」

私は医療現場に詳しくないが、それはきっと不可能だろう。発展するのは人を助ける技術ばかりで、人を殺す技術など、少なくとも公の場では発展していない。だから首つりなんていう時代遅れな死に方が今でも普通に使われている。第一――

「死刑囚の臓器もらってまで生きたいか？」

一昔前では同性愛者のドナー提供が断られたこともあったくらいだ。提供者の情報が一切相手には知らされないとしても、それを受け入れる者は、どれだけいるのだろうか。

「私は、生きたい」

百合香の声は、至極はっきりと、重みを含んでいた。

「もし、それで子供が助かるなら」

その重みに、話をもちかけようという気持ちは瞬く間にしぼんでいき、百合香の言葉に薄ら笑いを浮かべることしかできなかった。

その日、浅い眠りの中私はまた夢を見た。あの時と同じ夢だ。少女が何もない平原で笑っている。私と百合香が彼女を見守っている。しかし、今日の夢には続きがあった。少女は走っている内に突如現れた穴へ落ちて行き、思わず追いかけて自分も穴へ落ちようとする百合香を、私は必死に平原へ留まらせている。その間終始響いている泣き声があまにもリアルで、思わず跳ね起きて百合香が眠っているかどうかを確認した。規則正しい寝息を聞けることに、ひどく安心する。

一体どの立場の命を優先すればいいのかなんて、私には決められない。あるのは、もし目の前の命が他の誰かに奪われたら、その誰かを殺したいほど憎むし、もし目の前の命が誰かの命を奪ってしまうことになったら、何とかして死刑だけは見逃してほしいといった、自分勝手に矛盾した正義だけだ。この、「目の前の命、というのが一人なのか二人なのか、私にもわからなかった。

次の日の夜、私は高橋と共に駅前の居酒屋にいた。出勤時に高橋と顔を合わせる事が少し怖かったものの、実際は何事もなくスニーカーで仕事をやる高橋がいた。

そうだ。仕事なんだから当たり前だ。いくら囚人の名前を覚え、検閲を嫌がる高橋でも、職務そのものを放棄したことはない。

とくに理由があって最前線にしている訳でもない、個人経営の小さな居酒屋の席につくやいなや、了承も取らずにビールを注文した。

程なくして運ばれてきたジョッキ同士を当てて小気味良い音を出す。

「お疲れ様……って言っても、特別疲れることなんてしてないけど」

「一日仕事したんだから、この言葉を言う権利は十分にある」

二、三言交わした後、ビールを一口だけ飲んだ。反対に、高橋は一気にジョッキを空にして早速次の飲み物を注文している。

「お前にしてはペース速いんじゃないか？」

二杯目として焼酎を頼んだ後も高橋は変わらず、一口で飲み干してまた次を注文した。

「大山も飲めばいいのに。今日は奢るから」

まだ半分以上がビールで満たされているジョッキを見て、私は肩をすくめた。いつもならこのジョッキがもう一つあり、それが空になるまで三十分はかかるはずだ。

「それは困る。今日はこの前休みを代わってもらった礼のつもりなんだ」

とくにあらかじめ伝える予定はなかったが、先日電話でも同じことを告げたように、高橋もその前提でいるとばかり考えていた。当然こちらにはそんな金銭的余裕はないが、酒の席でそんなことを考慮するほど器の小さい人間ではないつもりだ。

「気にするな。こんな金、酒に変えるくらいしか使い道がない」

ジョッキを口に運ぶ手を思わず止め、口の中にはにがみが広がった。一体何の金なのか、聞かなくてもわかる。

「……今日一日で一萬五千元、何とか使い切らせてくれ」

その金額は少し値が張るものをいくらか注文すれば簡単に使いきれぬ。そして、先日病院で告げられた金額からは程遠いものだ。やはり、三十半ばの公務員の給料では無理がある。言い訳が、出来る――安堵と不安が折り重なった感情が押し寄せてくるのを、私はビールを口に含むことで流し込んだ。

隠そうとも思えなかった私の動揺を高橋は気にも留めず、料理の注文をとりに来た店員に、二人では余りそうな量を注文した。

「高校の政治経済の授業で、値段って価値を数値化したものだって、習わなかったか？」

料理がくるのを待つ間、もう五杯目となった酒を手にしながら大山がつぶやくようにいった。その情報は私には記憶になかったが、高橋は返事を待たずに続ける。

「つまりさ、加治さんを殺すことは一萬五千元の価値があるってことになるんだよな」

初めて聞いた名前ではあるが、それが誰のことかすぐにわかった。

私たちの拘置所では五人の職員がボタンを一斉に押すと、その内のどれか一つが作動し、天井からつるされた縄を首にかけて状態の死刑囚の足元だけ床が外れる仕組みになっている。実際に手をかけた人間が誰なのか、本人を含めた誰にもわからなくさせるシステムだ。だから、一萬五千元は人を殺す価値ではなく、人を殺したかもしれない人間になることの価値なんだ。なんて事はあまりにも野暮すぎて口には出さなかった。

「加治さんの罪名、知ってるか？」

私は首を横に振った。

「現住建造物等放火罪・二〇一〇年・お台場。これだけ言えばわかるだろう？」

その三つのキーワードが結びつく先に、私は息を呑んだ。二〇一〇年、お台場にある大規模な展示場が放火される事件があった。その日は毎年同じ会場で開催される、海外でも注目を浴びる即売会が行われていて、その場には十八万人ほどの人がいた。

この事件を説明するには、二通りの方法がある。ひとつはそれだけの人数を、一人の死者も出さずに避難させたというスタッフの武勇伝を語るか、致死がなければ死刑が適用されないという判例を覆したという事件の判決を語るかである。一部では裁判員が展示会のファンに買取

や脅迫をされたのではという報道もあったが、実際はわからないままだ。

「まさか、あの人がだったのか」

その頃から看守も視野に入れつつ刑法に関わる仕事をしたいと思っていた私にとって、死者が出ずとも死刑判決が下されたこの事件は印象的ではあったが、他の事件がメディアをにぎわせる頃には記憶の隅にいた。

店員によって料理が次々に運ばれてきた。中には一度食べてみたいと前に話していた料理もあったが、この状況で口に入れても、味を理解することが難しく、思わず箸をとめる。

私とは対称的に、高橋はかきこむように食べ物を口にして、流すように酒を飲んだ。そして、酒を飲み込んだ後の表情は、酒以外の重い何かを飲み込んだように見える。

「誰の命も奪ってない人を、俺は殺したんだ。大山、俺を軽蔑しないか。あれだけ死刑囚の人権を守ると吹聴していたくせに、結局は国家権力に負けて殺人を犯した俺を」

高橋は笑っていたが、瞳は依然そのままだ。

「それが仕事なんだ。仕方ないだろう。私なんて……何の罪もない、自分の子供を殺そうとしているんだ」

子供の現状を第三者に話したのは初めてだった。そして、自分が傾きかけている選択肢を口に出したのも。高橋は私の告白に目を泳がせたものの、それ以上は追求しようとしなかった。私としても、今は話したくない。

「大山。そんなお前だからこそ、俺が一番恐れていることを話すよ」

高橋はもう何杯目かわからない酒を飲み干した。少しろれつが回っていない。気づけば顔が真っ赤になっている。

「俺が一番恐れていることは、この先殺人を繰り返して、殺すことに慣れてしまうことだ。そのうち、それが快感に変わる日がくるんじゃないかって……」

そう言いながら右手をじっと見つめる。執行のボタンを押した手だ。きっと近い将来、私も同じ手を持つことになる。

「高橋、いくらなんでもそれは考えすぎだ」

これは自身にも言い聞かせていた。

「何度も同じことを言わせないでくれ、これは仕事だ。仕事内容を気に病むこともないし、快感だと思う方がおかしい」

高橋に訴えかけるように、精一杯目を見て話したつもりであったが、最早高橋の目は焦点が合っていない。

「大山は、ガンシューティングゲームをしたことはあるか？」

突然飛躍したように思える話題の展開に一瞬面食らったものの、素直に返事をした。

「友人に誘われて数回程度なら」

「あれ、射撃をしたいただけならただ的を撃てばいいはずだ。なんで、多くのゲームは人やモンスターを倒す仕様にしているんだ？」

そんな事考えたこともないが、改めて考えるとしたら、答えは簡単に出てきた。

「その方が、刺激があつておもしろいから」

高橋は大きく頷いた。この答えを期待していたようだ。

「つまり人は、本能的に誰かの命を奪ってみたいという感情があるんじゃないのか？」

「それとこれとは違う」

「いや、同じことだ」

間髪入れずに反論したつもりだったが、向こうも同じくらいの速度で翻した。

また一杯酒を呷ると、皿でテーブルが埋め尽くされているのも気にせずに突っ伏した。

「目を背けるのはやめよう。執行ボタンを押した瞬間、俺は確かに興奮していた」

信じられない。高橋はどこかの評論家以上に死刑に反対し、死刑囚を根本的には救えない自分の立場を悔やみ、それでも自分の出来る限りは彼らの人権を尊重するために日々奔走している男だ。

「.....あまりにも非日常な空間だったからだ。自責の念から緊張を興奮と取り違えたんだ」

私は高橋の肩をさするが、高橋は顔を上げなかった。

「ボタンを押す直前、加治さんの口が動いたんだ。『俺はやっていない』そう言っているような気がした。でも、俺はボタンを押した。終わった今考えれば、それはなんて浅はかな行為だったんだ」

その情景を想像しただけで、鳥肌が立った。もう審議は終了し、死刑は確定となっているが、もし、真実は違うのに死刑を執行してしまったら――その瞬間、確かに正義は鈍る。

「大山、俺たちはこの国で唯一、人を殺すことを許された職業だ。非日常だなんて言ってもらえない」

高橋はグラスを掴もうとしたが、その手に力は入らず、グラスは手に収まることなく横倒しになり、テーブルを転がった後、床に破片を散らばせた。

私はといえば、その光景を傍観していた。高橋の感情は、いずれ自分にも降りかかる。その時に私は高橋のように、ここまで悩むことができるだろうか。はっきりと割り切ることも出来ず、それでも一度眠れば何事もなく仕事をしてしまう自分のどっちつかずな姿をありありと想像できるのが悲しかった。

「ごめんな、酒の席でつまらない話をして。今はこの時間を楽しもう」

急いでグラスの処理に来た店員に水をオーダーし、高橋はようやく顔をあげた。私はただ、ジョッキに残る温いビールを全て流し込むことしか出来なかった。

乗客に白い目で見られながら、やっとの思いでバスを下車した。二人でよろめきつつも、夜風が心地よい舗道を歩く。

「大山、一旦拘置所へ寄ってもいいか？ 忘れ物をしたみたいなんだ」

普通の状態なら先に帰っているが、今ここで高橋を一人にするのは心配だったため、二つ返事で了承する。もう拘置所は目の前にある。私たちは連れ添って入り口の門を通った。

「お疲れ様です」

事務室へ向かうと、そこには斉藤さんが一人で書類に目を通していた。こんな状態の高橋を、よりによって斉藤さんと合わせることが不安だったが、意外にすっきりとした様子で声をかけている。

「こんな時間にどうした？」

こちらに視線を寄越すこともなく、斉藤さんは書類に判子を押し続けている。

「ちょっと忘れ物をしてしまいました。鍵を借りていきます」

高橋は幾つかの鍵を選び、私を事務室から出るように促した。

高橋の後をついていくがままに階段を降りる。一階は職員室と未決囚の収容所、地下一階が確定死刑囚の収容所、地下二階が自殺防止房と懲役房に保護房。高橋が更に会談を降りようとした時、思わず私の足は止まった。

「その先、なのか？」

高橋は無言で頷く。地下三階は私も最初の研修以来一度も入ったことがない。通常は“あの瞬間、しか使われない場所だった。

酒のせいかな、何度もよろめきながら、階段を下る高橋を見て、すかさず私もそれに続くと、その先には懐かしい空間があった。七年前に一度みたきりでも、はっきりと記憶に残っている。目の前にある扉は死刑囚が通るものであり、脇にある廊下を通り、裏側にもある扉は法務大臣や医師など、そして、「執行人」が通る扉だ。

「こっちで落としたみたいなんだ。一緒に探してくれないか？」

物音一つない廊下を歩き、突き当たりを曲がったすぐそばにある扉の鍵を開ける。少しきしむ音がする扉を全開にした。

少し躊躇したい気持ちもあったが、ここに来ては後にも引けず、中に入った。

「今電気をつける」

慣れた様子で高橋が壁にある装置に手をかけると、機械音が数秒鳴った後、周りが明るくなり部屋の全景がわかるようになった。二段構造になっていて、部屋の奥に下に続く階段があり、あとは机と椅子、そして机に設置されている五つのボタンがあるだけだ。ガラス張りで見える向かいの部屋は、くくられた縄がだらりと天井からかけられているだけで、その他のものは一切ない。

「そういえば、何を忘れたんだ？」

振りかえった矢先、扉が勢いよく閉まった。

何のことかわからずに立ち尽くしていると、ドアの向こうでカチャリと鳴る。

「高橋？」

ドアノブを何度まわそうとしてもぴくりとも動かないことで、ようやく自分の状況を理解することができた。閉じ込められた。しかし、何のために——直後、遠くで聞こえた音により、それを把握させられた。

「大山、騙してごめん」

向かいのドアから高橋が姿を見せる。ガラス越しの声は少しくぐもっているが、問題なく聞き取ることができた。

「.....どうして、こんなことを」

「お前の予行練習だ」

私が返事をしていないのに、高橋は何のためらいもなくロープを首にかける。

私は壁の装置を見た。複数のスイッチが入っているようだが、どこにも詳しい説明が書いていない。高橋が既に処刑室の中にいる以上、何もわからないのに下手に操作することは出来なかった。

「これで高橋が死んだら、私はどうなる？」

保身に走ったのではない。高橋自身より、私の利害で訴えた方が、今の彼には有効だと思ったのだ。

「判例としてはこの場合執行猶予がつく。状況としても無理やり脅してやらされているのだから実刑判決が下りる可能性は低い。大山が協力してくれると言ったら、俺は内側からその部屋の鍵を開ける方法を教えるよ」

高橋の言う通り、これは半ば脅しだった。このまま何もせずにいることは、不可能だ。私自身、いつ行われるのかもわからない次回の執行までここに閉じ込められることになるし、私が拒否の態度を取れば、高橋は一人で死ぬことも出来るのだ。

「押したボタンが作動しなかったら？」

「その時は、一緒に帰ろう」

高橋は屈託のない笑顔を見せたが、逆にそれが威圧的であった。

「頼むよ、俺は自分の正義が壊れていく様を、目の当たりにしたくないんだ」

やはり、私がボタンを押さない限り、高橋は自殺するつもりだ。この展開が腑に落ちなくとも、覚悟を決める必要がありそうだ。高鳴る鼓動を抑え、一番端の席に座る。

「それでいい。目の前のボタンを押した後、装置の一番左下のスイッチを三回押して外に出るんだ」

この鼓動は、決して興奮故ではない。目の前のボタンを押したその瞬間、自分は人殺しになるかもしれないという、未来への純粋な恐怖であった。しかし、これはお門違いな恐怖だ。何故なら、自分は決定的ではないにしろ、もう既に一人の人間を殺そうと考えていた。高橋は先ほど、これを予行練習と言った。きっと高橋の中では、いつか私にも振りかかる“あの瞬間、を見据えていたのだろうが、私にとっては、もっと身近な、人を殺すという事実への予行練習であった。

ボタンと高橋を交互に見る。酒のせいで言動がおかしくなっているのだと思いかけた。しかし、私は的確に人を閉じ込める様を見せられてしまった。多少ろれつがおかしい箇所はあるが、言っていることははっきりとしている。何より、私は七年間高橋と共に毎日を過ごしてきた。こんな事を、酒を理由に冗談で持ちかける人間ではない。

だからこそ、私はそのまま外に出るという選択が出来なかったのである。今外に出て、回り込んで高橋を止めることは可能だ。しかし、高橋は自身の命よりも、自分が仕事として奪った命、これから奪うだろう命を重いと感じている。私が何もしなければ、高橋はこの気持ちを背負い続けなければならない。

ゆっくりと、ボタンに手を触れる。冷たい感触が手のひら全体を包み込んだ。手が震える。高橋の方を見ることは出来なくなっていた。この先“執行人、となる度に同じ状況になるのだろうか。なるのとならないのでは、どちらが人間として正しいのか。

私は高橋にはわからない位置で、座ったまま机を激しく蹴り続けた。どうして自分がこんな事をしなければならないのか、どうして高橋がここまで自分を追い詰めてしまったのか、知らず知らずの内に怒りがこみ上げていた。こっちの気も知らないで死刑になるような事件なんか起こしやがって。後先考えずに軽々しく死刑判決ばかり下しやがって。この矛先が定まらない怒りは、いつしか私達を解放してやりたいという気持ちを後押しさせていた。例え一時的だとしても、目の前のボタンを押せば、一瞬にして解放される。

“その瞬間、は、まるで映画のワンシーンのように、ゆっくりと、迷いがなく訪れた。

カチリと音が鳴り、室内には静寂が広がる。

おそろおそろ顔を上げると、ガラスの向こうには地に足をつけた高橋が立っている。

「.....格好悪い」

高橋は力なく笑った。足を浮かせようとはしない。約束を、守ってくれるようだ。

「よかった.....」

私はその場から立ち上がることが出来なかった。あの行為は、それくらい体力が必要なのだと初めて知った。

「——もう、十分か？」

しばらくして、タイミングを見計らったかのように、高橋の背後にあるドアが開いた。その低い声に、笑い声がかき消される。

「斉藤さん、気づいていたんですか？」

存在に一早く気づいた私が声を上げる。

「当たり前だ。鍵を借りる場所なんて限られている。怪しまない方がおかしい」

高橋は背後に立つ人物に気づいてはいるものの、決して振りかえろうとはしなかった。よく

見ると、膝がガクガクと震えている。それを見て、斉藤さんは大きく咳払いをした。

「高橋！」

それは囚人の呼称番号を呼ぶ時と同じ、全体に響き渡る、高圧的な発音だった。

「縄から離れ、こっちを向け」

有無を言わさぬ態度に、高橋は静かに縄から首を外し、斉藤さんと向かい合った。

「お前は日ごろから、全ての人間には平等に生きる権利があると言っているが」

それは高橋へ向けての言葉であったが、静かすぎる空間では私の耳にも十分に届いた。

「人は、環境により行為を許される動物だ。その行為は、生きることそのものも例外ではない。中には生きる事すら許されない環境にいる人間もいるんだ」

普段の高橋なら即座に食って掛かっただろう。しかし今は、何も出来ずに立ち尽くしている。斉藤さんは反応を待たずに続けた。

「それは何も国際情勢や公共の福祉から為る環境の話だけじゃない。個人的に作り上げられた環境で、切り捨てられる命がある」

個人的に作られた環境の中に、斉藤さんの妹がいたのだろう。私達の子供も同様に、私たちが勝手に作り上げた環境の中で、生きてもいいのか否かの審判を待っている。

「私たちが行っている切り捨ては、それで新たなものは生まないし、誰かの命を守る訳ではない。それでも、救われる人間がいる。そして、国の秩序が守られる。死刑は必要だ。少なくとも、今の日本ではそうなっている」

以前保護房の前で私に話をした時と同じような口調だった。論すような、優しいそれである。斉藤さんはゆっくりと高橋に近づき、高橋の両肩に手を置いた。

「切り捨てられた命に対し、正義への未練があるのなら、生きなさい。どの環境からも許されている命を、自分で切り捨ててはいけない。切り捨てられた、全ての命のためにも」

高橋の目から、ボロボロと涙がこぼれた。高橋はそれを拭おうともしない。

きっと私たちは、全員が命の天秤を押し付けられているんだ。軽い方は切り捨てなければならず、でもその重さを決めるのは、自分ではない。どんな設計かもわからない天秤に命を乗せて、命を切り捨てるから、そもそも自分の正義を介入することもできない。

『余計な情報を入れると、正義が鈍る』

この言葉の真意は、その事実を目の当たりにし、自分の正義で自分を追い込まないようにする事なのかもしれない。そして、斉藤さんもまた、軽いと決め付けられた命の重さに、今も押しつぶされている。

私は走って、二人の下へ向かった。その廊下は、見た目以上に長く感じられた。

この数年間でカーナビは随分と進化した。目の前の道路に矢印が浮かびあがり、細かい道でもまず迷うことはない。

「悪いな、病院に行く前に、寄り道をして」

助手席にいる百合香に声をかけると、彼女は笑顔で首を振った。

「いいよ。最近ドライブとかしてないし」

百合香は窓から外を見つめた。地元ではあまり見られない景色だ。

実際のところ、決断をする際に気分を切り替えたかったこともあり、本当は一人で十分な野暮用を同行させた。それに、あらかじめ二人の気持ちを固めたかった。お互い禁句のように封をしていたあの話題は、今もまだ解かれていない。

八二〇六番から頼みごとをされたのは、執行部屋の一件から一週間が経ってからだった。拘

置所は何も変わらない。高橋はスニーカーで足音を立てないように廊下を歩き、斉藤さんは不必要に足音をとどろかせ、私は自分の存在を気づかれる範囲で足音を立てる。

「願い事は、あるか？」

朝の巡視中に声をかけると、八二〇六番は手招きをし、私に茶封筒を手渡した。住所などは書いていない。

「これは？」

「貴方宛の手紙だ。思えば名前も知らなかったから、ここに来てくれるのを待っていた」

これは遵守事項違反だ。ほかの誰かに見つければ、即懲罰処分となるだろう。断るべきか悩んだが、結局はその手紙を受け取った。

「.....一度きりですよ」

こうして届いた手紙により、私はこの場所へ訪れることとなった。

『拝啓 手紙を受け取れなんて無理な要望に応じてくれてありがとうございます。今回、貴方に手紙を書いたのは、一つ頼みがあるからです。後記に記す私の実家にある、赤い箱を届けてほしいのです。実家とは死刑が確定となった時に籍を抜かれたので、私から手紙を送ることは不可能で、また、娘に頼もうとしたところ、それは第三者への接触として、検閲により削除されてしまいました。しかし、これを、何もしてやれない私からの、娘への誕生日プレゼントにしたいのです。そしてこれは、言葉足らずの私なりの、娘への遺言でもあります。非常に身勝手なお願いであることは承知しております。だからこそ、貴方に頼みたかったのです。この気持ちを理解してくれつつも、危険を顧みず実行する事はないだろう貴方に。もう何人もの人に迷惑をかけた身です。少しでも貴方が面倒だと感じたら、どうぞこの手紙はなかったことにしてください』

その手紙の一番下に、今いる場所の住所が書かれていた。あまりにもへりくだった故にまとものない文章からは、懇願がにじみ出ている。こんな頼みごとは勿論初めてである。身勝手である上、こんなことをしてやる義理もなかったが、不思議と面倒には感じなかったので実行してやることにした。この行為は同情や、少しでも彼を救ってやりたいという人権擁護でもなく、気まぐれだ。

「まもなく、目的地周辺です」

カーナビの電子的なアナウンスが聞こえ、私は誘導を全てオフにした。実家に着いたとしても、車を停める場所がない。宛てもなく走った先に見つけた、小さな酒屋に車を置く。

私たちは車を降り、歩道のない道を歩き出した。上を見ると、地元ではもう見られなくなってしまった、綺麗な青空がある。

この空の下なら、言えるかもしれない。

私は息を吸い込んだ。

「ねえ、慧ちゃん」

声を出そうとした瞬間、百合香に先を越された。百合香止まったので、私も同様にする。

「尊属殺人罪が廃止したの、いつだっけ？」

唐突な話題だった。もう学校のテストでしか扱わないような言葉だ。そういえばテスト前は、二人でこんな問題の出し合いをしていたな、と思い出しつつ、私は学生時代に戻ったつもりで、その答えを搾り出す。

「確か、平成七年」

「まだ二十年くらいしか経ってないんだね」

百合香はうつむいて、自分のお腹をなでた。ただし、これは表面的な表現で、本当になでているものは、お腹ではない。

「二十年前には家族を殺しちゃうことは普通の殺人より大罪だったのに、何で生まれていてない子供を殺しちゃうことは、何の罪にもならないんだろうね」

そう言われてしまうと、決心がゆらぐ。

「それは、まだ日本の戸籍に登録されず、生存権が保障されていないからじゃないか？」

口に出してから、なんてくだらないことを言ってしまったんだろうと思った。決心をゆるがせたくない余りに出た屁理屈だ。

「ごめん、撤回する」

「いいよ。だって、本当のことじゃん」

百合香はクスリと笑った。そして、でもね、と付け加える。

「どんなに国に保障されてなくても、私はこの子ともう何ヶ月も一緒に生きてるんだよ。いくら何の罪にもならないって言われても、私には尊属殺人と同じくらい、苦しいよ」

青い空は私の弱い心を見透かしているようだった。真昼間の公道だということを投げ出して、泣き叫びたい衝動に駆られる。

百合香は、私に天秤を提示している。自分の命よりも、子供の命の方が重いという提示を。それに対して私は、出来ることならどちらも失いたくないという、都合のいい事しかいえない。費用が払えそうにないなどというくだらない言い訳まで用意したくせに、結局ここまで来て何も切り出せなかったのは、子供を見捨てることを、本心から決意出来なかったからだ。

「ねえ、手術、受けてみてもいいかな？」

私に代わり、百合香が核心に触れた。

「何があっても、君を失いたくない」

情けないと、我ながら思うが、どうにも出来ない。白黒つけるのが苦手な私には、はっきりと意思表示が出来るのは、これだけだ。

百合香は私の頭を撫でた。子供をあやすような優しいそれだった。

「私も。だから、最後は慧ちゃんが決めればいいよ。私の気持ちは全部言ったから、あとは慧ちゃんが判断してくれればいい」

恋人時代から換算すると、もう十年以上連れ添っているだけある。百合香は私の気持ちなど、全てわかっていたのである。この期に及んで決められないことも、いつそ百合香が全て決めてしまったら楽だろうと思っている、自覚もしていなかった面まで。だから私に委ねたのだ。百合香と子供だけではなく、家族の問題として、私を捉えさせるために。

「ホラ、早く用事済ませちゃおうよ、パパ」

何気なくいわれた最後の言葉に胸が弾んだ。

「妊娠した時から、こう呼べばよかった」

百合香は照れくさそうにはにかんだ。

手紙に書かれた住所は、酒屋から十メートル程歩いた先にあった。年季が経っているようだが、大きな家で門に家紋が刻まれているのを見ると、中々由緒がありそうな家だ。

インターホンを鳴らし、そのまま待つ。一分もしない内に引き戸が開いた。

「どなた様ですか？」

髪の殆どが白髪になった女性が、見覚えのない私の顔をいぶかしむ目で見てきた。

「突然失礼いたします。私、八……」

思わずいつも通りの呼び方をしそうになり、慌てて口をつぐむ。

「柵橋さんから、頼みを受けて参りました」

名を出すと、女性は眉間にしわを寄せた。

「彼から、この家に置いてある赤い箱を取ってきて欲しいと言われてまして」

女性の態度から、早く事を進めた方がよさそうだと判断し、用件を先に伝えた。

「赤い箱……ああ、ちょっと待ってなさい」

奥へと戻り、じきに階段を上る音がする。

百合香には全容を知らせていない。文字通り、知り合いに頼みごとをされた。とだけ伝えている。そのせいか、相手の態度にいささか不安そうな表情をしている。

「お待たせ。これだろう？」

ギンギンと音を立てながら女性は玄関へと戻ってきた。広辞苑が一冊入りそうな大きさの箱は、老人女性には持つのも厳しいらしく、腰が曲がっている。擦り付けるように箱を私に渡すと、勢いよく引き戸は閉じられた。

聞こえるのか定かではないお礼を言い、箱を見つめる。見たところはそんなにたいそうな箱だとは思えない。

『これは、言葉足らずの私なりの、娘への遺言でもあります』

不躰であるのは重々承知であるが、私はこの箱の中が見たいと思った。彼が遺言として、十年も会っていない娘に渡したいと願うものは何なのだろうか。

面倒なら構わないという頼みを、わざわざ聞き入れてやったんだ。手間賃として、見るくらいいいじゃないか。そう自分に言い聞かせ、私はその場に座った。百合香も隣に座る。

ゆっくりと箱をあけると、埃がハラハラと舞い落ちた。そして、いくつもの色あせた写真が目に入る。二十年前は、やっとデジタルカメラが世の中に出回りだした時期だ。色素が抜けている写真の中に移っているのは、全てたった一人の少女だった。少女が幼い時のものはカメラに向けてはっきりと笑顔を向けているが、少女が成長するにつれて、カメラの存在も気づいていないような写真が増えていった。それでも写真の裏を見ると、ご丁寧に年月日、その日の少女の様子と思われる記述が事細かに書かれている。

一つ一つの写真をまばらに目を通してると、箱の蓋に一枚引っかかってしまっている写真があることに気づき何気なく手を伸ばし、その写真を見た瞬間、私は思わず息を呑んだ。

「――嘘だろう」

その写真は、少女が十歳くらいと思われる、その時期にしては珍しくカメラに向けて笑顔を見せている写真だった。しかし、私が驚愕したのはそこではない。

写真の背景に写っているのは、まさしく私が夢で見てきた草原であった。たった二度しか見ていなくても、たった一枚の写真しかなくても、直感でここはあの草原だと確信できる。少女の笑顔に手を触れた瞬間、その触れた先から暖かいものが伝わり、体中を二人の二十年間の人生が駆け巡った。

百合香がもう片方の私の手を取り、自身のお腹にあてる。私の手を握る百合香の手から伝わる鼓動が、いつしか私のそれと重なり、百合香の中心へと伝わり、吸収される。

ここにまた一つ、命の鼓動を感じた。

参考資料 「Q & A 死刑問題の基礎知識」(二〇〇四) 菊田幸一／著 明石書店

「死刑廃止に向けて 代替刑の提唱」(二〇〇五) 菊田幸一／著 明石書店

「死刑のすすめ 積極的死刑拡大論」(二〇〇五) 長田鬼門／著 中央公論事業出版